

ワーズワスの旅 : sweet wayfaring/sweet return

著者	吉川 朗子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	55
号	3
ページ	79-95
発行年	2004-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000995/



ワーズワスの旅—— Sweet Wayfaring/Sweet Return¹

吉川朗子

<土着詩人／旅人詩人>

詩人を「土着の詩人」と「旅の詩人」とに分けるならば、「湖水詩人」と称され、その晩年からその死後、現在に至るまで湖水地方観光のひとつの誘引力となっているワーズワスは、どちらかと言えば前者に分類されるであろう。その一方でワーズワスには、一日に50キロも歩くことのできる健脚の持ち主、いつも戸外で歩きながら詩作していた「歩く詩人」というイメージもある。“An Evening Walk”や“Descriptive Sketches”などに始まって、*The Prelude* や *The Excursion* にしても、ワーズワスの作品には旅人、旅がモチーフになっているものが多く見られる。そして最晩年にいたるまで、湖水地方、スコットランド、ウェールズなどの近場から、ヨーロッパ大陸まで広範に旅をし、その成果を多くの作品に残している。ワーズワスは偉大なる「旅人詩人」とも言える。

今回考えたいのは、ワーズワスの持つこのふたつのイメージ——一方では、故郷を愛し、故郷の土地に根ざした作品を残した「土着詩人」というイメージ、他方では、街道に憧れ、wanderer という言葉に憧れ、何ものかに憑かれるように異国の地へ旅立っていった「旅人詩人」としてのイメージ²——

1 本稿は2003年10月11日慶應義塾大学にて開催された第29回ロマン派学会全国大会におけるシンポジウム（テーマ：「旅とロマン主義」）での発表原稿に加筆修正を施したものである。

2 ワーズワスは *The Excursion* へのコメントの中で、自分にとって旅(wandering)は passion なのだと言っている。(PW, V.373) また *The Prelude* には街道への憧れが次のように表現されている。“I love a public road: few sights there are/That please me more—such object ♂

—が互いにどう関わりあうのかということである。ある場所に留まること (dwelling) と異国の地をさまよい旅すること (travelling) とは、ワーズワスの中でどのように関わっていたのか——これを考えることで、ある一人のロマン派詩人にとっての旅の意味について考えてみたい。³

ワーズワスの人生を「旅」という観点からふたつに分けるならば、1799年のグラスミアへの移住を区切りとすることができる。幼くして両親を亡くしたワーズワスの若き日々は、生家を離れてグラマースクールへ行き、湖水地方を離れてケンブリッジへ行き、故国イギリスを離れて大陸へ行くという具合に、遠心的に放浪の旅を続ける人生であった。特にケンブリッジを卒業してからドロシーと再び暮らし始めるまで (1791-1795年) のワーズワスは、物理的にも精神的にも self-exile とも言うべき状態にあった。このまま異国の地で潰えたなら、ロマン派第二世代の詩人たちと同じようなイメージが出来上がるわけだが、⁴ 1799年、29歳のワーズワスは妹のドロシーとともに故郷へ帰り、グラスミアに家を構える。1802年には幼馴染メアリと結婚し、これ以降は湖水地方に根ざした詩人というイメージが固まっていく。

しかし、結婚はワーズワスの漂泊の想いを留めることはない。1803年8月、生まれたばかりの子供と妻を置いて、ワーズワスは妹ドロシーとともにスコッ

hath had power/O'er my imagination since the dawn/Of childhood, when its disappearing line/Seen daily afar off, on one bare steep/Beyond the limits which my feet had trod, /Was like a guide into eternity,/At least to things unknown and without bound." (*The Prelude*, 1805, Bk.12: 145-152)

3 留まること (dwelling) とさすらうこと (travelling) との微妙なバランスは、旅の詩のみならず故郷の湖水地方を舞台にした作品にも見られる現象であり、これについては拙論 "Traveller and Dweller: Wordsworth in Grasmere" (2001) で詳しく論じている。

4 実際、ワーズワスも1793年23歳の若さで、フランスにおいて命を落としていた可能性もある。フランスにいる外国人はみなスパイとして捕らえられ、投獄され、多くの者が処刑されたという1793年10月に、ワーズワスはパリにいた可能性があるのだ。友人だったジロンド党員 Gorsas の処刑 (1793年10月7日) を目の当たりにしたということを後にカーライルに語っていると言う。 (Johnston 358-77) 少なくとも、大学卒業後の1791年から1795年、ドロシーと再び暮らし始めるまでのワーズワスは、様々な場所を転々とし、友人・親戚宅に世話になって歩く gentleman vagrant と呼べる状況であった。両親を亡くし、財産をなくし、大学はかろうじて卒業したものの、援助してくれる親戚の期待にはこたえることができず (反抗)、詩人として身を立てたいという思いもうまくいかず (自信喪失)、革命の精神に共鳴して渡ったフランスではその期待を裏切られ (失望)、逆に自分は恋人と彼女に産ませた娘を裏切ることになり (自己嫌悪)、まさに八方塞、身の置き所のない self-exile という状況にあった。しかしワーズワスは、ドロシーの献身的な支えのおかげで、また自然との交流により、この状態から救われていく。

トランドへ旅立つ。そしてワーズワスの旅人としての人生は第二段階に移行する。今回考察するのは、このワーズワス後期の旅についてである。

主に取り上げるのは、1820年ワーズワスが50歳のときに行った大陸旅行と、それを記念して書かれた作品集“Memorials of a Tour on the Continent 1820”であるが、1803年のスコットランド旅行での経験から生み出された作品集（“Memorials of a Tour in Scotland 1803”）の巻頭を飾る作品“Departure”は、ワーズワス後期の旅の特徴を端的に表していると思われるので、まずこれを見ておきたい。

<Sweet Return>

この作品で詩人はまず、パラダイスのような場所の住人であっても、たまにはよその土地へ行ってみたいと思うものだと言い、また自分のいる所より居心地が悪いと分かっている、彼の地の習慣風習を知ってみたいとなるものだと弁明する。詩人は Grasmere＝「世界一美しい場所」、Scotland＝「それに劣る場所」という前提のもとに、しかし自分はこの楽園を追い出されるのではなく、自分から選んで出て行くのだ、自分は自由なのだと強調する。そして、自分は「自然が与えてくれる自由」を心に抱き、「荒れ果てた海岸 (wildest shore)」(25)、「吹きさらしの荒野 (bleakest moor)」(26)を旅するのだ、と宣言する。

この詩がミルトンの *Paradise Lost* を意識していることは明らかだろうが、もちろんこれはパロディである。それは特に最終2行によく示されている。

Ne'er can the way be irksome or forlorn

That winds into itself for sweet return. (31-32)

アダムとイヴの場合、楽園を追放された彼らは、戻ってくることはできない流浪の身であった。それに対しウィリアムとドロシーは楽園を追放されたの

ではなく、自分たちから選んで出て行くのであり、しかも彼らの旅は帰郷を前提とした旅、旅行に過ぎない。一方では荒涼としてうら寂しい異郷の地を歩くのだと、辛い道行を覚悟している素振りを見せるが、他方では「楽しき帰還 (sweet return)」をはじめから期待している⁵。若き日のワーズワスの旅が、身の置き所を持たない self-exile という特徴を持っているとしたら、excursion すなわち帰郷を前提とした周遊旅行という定義が、ワーズワス後期の旅を特徴付けていると言っておきたい⁶。

ただし、1803年のスコットランド旅行を記念した作品集においては、漂泊の想いと望郷の想いのどちらが勝っているかといえ、前者の力（外向き・前向きの力）の方が強く働いているようだ。つまりこの作品集においては、“To a Highland Girl”, “The Solitary Reaper”, “Stepping Westward” など主要作品を思い出せばすぐに気づくように、孤独で気儘な旅の自由を楽しむポーズ、異国情緒、果てしなき道への憧れが強く見られる。ワーズワスが『1803年スコットランド旅行記念詩集』で作り上げたかった旅のイメージとは、「遠い異国、見知らぬ世界、果てしなき道」をさまよう「孤独な旅人」というものであった⁷。ただし、冒頭の“Departure”という詩についてすでに指摘したように、そうは言いつつも、この旅は当てのない旅 (wandering,

5 “sweet return” という語句も *Paradise Lost* に見られる：“...to short absence I could yield. / For ... short retirement urges sweet return.” (Bk. IX: 248-49, 250) これはイヴがしばしアダムのそばを離れてひとりで仕事をしたいと主張するときの言い草だが、結局彼女が予期した “sweet return” は果たされることはなかった。イヴがアダムのもとをしばし離れたことが遠因となって、彼らは樂園を永遠に追放されることになり、帰る場所のない流浪の身となる。ワーズワス兄妹の場合も、出かけるときには “sweet return” を期待していても必ずしもこれが実現しないかもしれないという思いは持っていた可能性はある。しかしワーズワス後期の旅は全てこの「楽しい帰郷」が結びに来るため、*Paradise Lost* の場合に見られるようなアイロニーはない。

6 John Glendening は、ワーズワス兄妹の1803年のスコットランド旅行とそこから生まれたふたつの作品群を検討し、ウィリアムの『記念詩集』にもドロシーの『回想録』にも home / abroad という二項対立が見られ、homeward journey への志向、outward journey への志向の両面が見られると指摘している。(Glendening 138-153) 特に “Departure” に見られる「帰郷への志向」については140-41頁に詳述されている。

7 1803年のスコットランド旅行記念詩集については拙論「帰属場所を求めて——ワーズワス兄妹によるスコットランド旅行(1803年)」(2002年)で詳述した。そこでは、注6で挙げた Glendening の分析を踏まえつつ、ドロシーの『回想録』には家庭的なるものへの志向、望郷の想いが強く見られるのに対し、ウィリアムの『記念詩集』には「漂泊の想い」が勝っていることを指摘した。

roaming)ではなく、sweet returnを前提にした旅行(excursion, orbiting)であるという認識をも潜在的には持ち続けているということ、このことにも留意しておかなければならない。そうした認識が表面に出てくるのが、1820年の大陸旅行記念詩集である。では、『1803年スコットランド旅行記念詩集』と比較しつつ、この大陸旅行記念詩集の特徴について考えてみたい。

<1820年大陸旅行>

50歳のワーズワスが、妻メアリー、妹ドロシー、その他の友人たちと共に行った1820年の大陸旅行の目的は、ひとつにはナポレオン戦争後のヨーロッパを見てくること、もうひとつは二十歳のときに行った大陸旅行の跡を辿ることだった⁸。30年前にはアルプスの崇高なる風景を体験することが主たる目的だったが、今回の旅行では、ミラノの大聖堂見学、オペラ鑑賞など都市文化を楽しむことも旅程に入っている。ただし、ドロシーが旅の目的はアルプス登山にあると繰り返し言っているように、少なくともドロシーにとっては、若き日の兄ウィリアムが旅をし、興奮気味の手紙を送ってきてくれて以来、ずっと憧れてきた、言わば「聖地」を辿るというpilgrimageの要素が強かったようである。

さて、1803年のスコットランド旅行の場合と同じく、この旅行でもドロシーは生き生きとした旅行記を残しており、これに触発される形でウィリアムの旅行記念作品集が生まれている⁹。これらを比べてみると、面白いことに、

8 ウィリアム、ドロシーどちらの作品にも記されていないが、ウィリアムの昔の恋人アネットと彼女に生ませた娘のキャロラインに会うこともこの旅の目的のひとつだった。9月末パリに着いたウィリアム、メアリー、ドロシーはおよそ一ヶ月この二人と過ごしている。(Gill 340)

9 ドロシーの旅行記について言うと、1803年の旅行記が回想録として書かれたのに対し、今回の大陸旅行記は旅行中のメモ書きをもとに旅行後すぐに“Journal of a Tour on the Continent 1820”としてまとめられたため、散漫・冗長なところもあるかわりに、臨場感に溢れた生き生きとした描写も多い。一方ウィリアムの“Memorials of a Tour on the Continent 1820”は、スコットランド記念詩集に比べると、作品数は倍近くあるが力がない。その内容は雑把に纏めれば、旅先で出会った風景、事物、人々、風習、伝説などを題材にして歴史、戦争と平和、自由・独立の精神、信仰、時間の流れと無常などについて思いをめぐらすといったものになっている。ナポレオンの失脚からまだ5年しか経っていないということで、いたるところにナポレオン戦争の爪あとが覗いているということも特徴である。この詩集に見られる様々なテーマを概観したものとしては、John Wyatt, *Wordsworth's Poems of Travel: 1819-42* (New York: St.Martin's, 1999), 55-79がある。

1803年の旅行の際には家庭的・主婦的な関心を示していたドロシーは、今回は「女一人で異国をさまよう旅人」というイメージ、「アルプスの山々を徒歩で登ってしまう、体力気力に満ちた自立した女性」というイメージを強く打ち出そうとしている感がある。一方、1803年の旅では「孤独な一人旅」のイメージを作り出そうとしていたウィリアムは、今回は多くの詩において一人称複数の主語を用い、連れのいる旅であることをそのまま受け入れている。一人旅のふりはしないのだ。巻頭の商品“Dedication”は、“Dear Fellow-travellers!”(1)という呼びかけで始まり、自分の作品は旅の経験を十分再現できていないかもしれないが、皆の鮮やかな記憶に頼ればこの作品に息を吹き込むことができるだろう、と言っている。ずいぶん控えめな態度というのか、旅の経験の共有、記憶の共有を前提としているあたりは、1803年の旅行を記念した詩集における高揚した調子、たとえば“The Solitary Reaper”, “To a Highland Girl”などでの、ドロシーの存在を無視して一人旅の自由、孤独を謳歌するような書き振りとはだいぶ異なる。

孤独な旅人という表象がほとんどないのと同時に、旅先で出会う風景にも、孤独感というものはあまり見られない。静けさを描いた作品はいくつかあるが、それは人里はなれた寂しい静けさ (remoteness) ではなく、都市の静けさであったり、人々の憩う場における静けさであったりする。たとえば、中世のたたずまいを残すブルージュの町の夕暮れを描いた “Brugés I saw attired with golden light” は次のように結ばれる。

[.....] these silent avenues

Of stateliest architecture, where the Forms

Of nun-like females, with soft motion, glide!” (12-14)

すべるように動く尼僧の影によって、静けさが一層引き立つようである。また “Memorial near the Outlet of the Lake of Thun” では、日没後残照

に包まれた丘の静けさが描かれるが、ここでもその丘に建てられた記念碑——ナポレオンに対抗した勇気ある総司令官 Reding の名を刻んだ記念碑——の周りをそぞろ歩きする人々の姿がシルエットとして描かれ、静けさを引き立てている。もうひとつ例を挙げるならば、“The Solitary Reaper” と面白い対照を成すと思われるのが “Scene on the Lake of Brientz” である。収穫の歌を歌う娘は、ここでは一人ではなく複数おり、彼女たちは肩を組み合って歌っている。

Now, where those harvest Damsels float
Homeward in their rugged Boat,
[.....] in order stand
The rustic Maidens, every hand
Upon a Sister's shoulder laid,—
To chant, as glides the boat along,
A simple, but a touching, song;
To chant, as Angels do above,
The melodies of Peace in love! (5-6, 11-17)

彼女たちの歌うのは、遠い日の戦闘を思わせるようなものではなく、愛と平和に満ちたものである。また、彼女たちは家へ帰るところだとある。共同体からひとりぽつんと離れて歌う孤独な乙女のいる風景とは違い、ここにはともに収穫を喜び合う共同体の姿が見られる。

こうした共同体の姿は、カレーの港近くで出会った魚売りの女たち (“Fish-Women.—On Landing at Calais”), ナポレオンに抗した総司令官やウィリアム・テル親子など、地元の英雄をたたえる記念碑の周りにたたずむ愛国者たち (“Memorial near the Outlet of the Lake of Thun”, “Effusion in Presence of the Painted Tower of Tell, at Altorf”), 聖母マリアの宮に

集う信心深い人々 (“Our Lady of the Snow”) などを描いた作品の中にも見ることができる。1820年の旅行を記念した作品集から得られるのは、孤独な旅人が孤独な風景と出会うというよりも、仲間とともに旅をし、共同体のある風景と出会うという印象なのだ。

そして、旅をする喜び (wanderlust) は、故郷を想う心 (homeward thoughts) とバランスをとる形で現れる。一番図式的な例としては、“The Italian Itinerant, and the Swiss Goatherd” という作品が挙げられる。タイトルが示すように、これから異国の地へ旅立とうとする冒険心に富む旅商人と、先祖が見守る土地から一歩も出ることのない、内気なヤギ飼いの少年とが対照されるのだが、より大事なものは、旅商人自身の中にある二つの衝動である。

Now that the farewell tear is dried,
Heaven prosper thee, be hope thy guide!
Hope be thy guide, adventurous Boy;
The wages of thy travel, joy! (1-4)

このように詩の冒頭には、若き旅商人がイングランドという「誇り高き自由の島 (the proud Isle of liberty)」(30)への希望を胸に抱いて、喜びに満ちて旅に出る様子が描かれる。これに対して語り手は、この若者が旅先で家族や恋人のことを恋しく思うことが時折あるだろうと予言する。

Yet will the Wanderer sometimes pine
With thoughts which no delights can chase,
Recal a Sister's last embrace,
His Mother's neck entwine;
Nor shall forget the Maiden coy
That *would* have loved the bright-haired Boy! (31-36)

しかし若者は旅に出ることを躊躇することはない。なぜなら彼は、家族や恋人が待つ生まれ故郷に必ずや無事帰れることを確信しているからである。

For this Adventurer scruples not
To prophesy a golden lot;
Due recompense, and safe return
To Como's steps—his happy bourne! (39-42)

旅商人の彼は、未知なる世界への憧れと、馴れ親しんだ故郷への愛着との両方に引っ張られて、故郷と異国とを往復する。ちょうどワーズワスが、まるで帰郷するために旅に出かけていくかのようなのであるのと似ている。この旅商人はワーズワス的旅人のひとつの典型と言えるだろう。

旅心と里心¹⁰とが拮抗している作品は他にも幾つかある。たとえば“On Hearing the ‘Ranz des Vaches’ on the Top of the Pass of St. Gothard”という作品では、スイス人にとって郷愁を引き起こすという角笛の音色をきいて、自分の想いも遠い故郷へ向かうのだという内容になっている。スイス人が異国の地で聞くと郷愁のあまり死んでしまうという角笛の音色も、ワーズワスには素朴な音にしか聞こえず、心を揺さぶられることもない。しかし自分にはその郷愁を一笑に付すことはできないとして、次のように詩を結ぶ。

Aspiring thoughts, by memory reclaimed,
Yield to the Muse's touching influence;
And joys of distant home my heart enchain. (12-14)

ここには、山に登ろう、道を突き進もうという詩人の旅心が、思い出、郷愁

10 Wyatt も “On Hearing the ‘Ranz des Vaches’ on the Top of the Pass of St. Gothard”, “The Eclipse of the Sun, 1820”, “Stanzas Composed in the Simplon Pass” に見られる郷愁 (homesick) について指摘している (Wyatt 60-61) が、私が指摘したいのは、郷愁と旅心との拮抗関係についてである。

によって引き戻され、遠くの故郷と鎖でつながれる様子が示されている。

“The Eclipse of the Sun, 1820” という作品も見ておこう。この詩の前半は “Afloat beneath Italian skies, / Through regions fair as Paradise / We gaily passed” (7-9) といった具合に美しい異国を旅する喜びにあふれている。太陽が欠け始めると、これもまた珍しい体験として好奇心を持って描写され、ミラノの大聖堂に想いを馳せたりする。しかし太陽が再び輝きだし、風景が見慣れた様子を取り戻していったとき、詩人はふと馴れ親しんだ故郷のことを思い起こす。故郷ではこの日食はどのように見えたのだろうか、あるいは見えなかったのだろうかと思い、故郷の様子が分からないこと、情報が欠如していることを “Sad blindness!” (82) と嘆く。日食は、自分の中に欠けているものの存在、あるいは故郷における自分の不在に気づかせ、詩人に郷愁を抱かせるのである。

こうした故郷への想い (home-thoughts) というのは、1820年の大陸旅行を記念したウィリアムの詩、ドロシーの旅行記双方に強く表れている心情である。ドロシーは、旅先で見た風景を度々英国湖水地方の風景と比べて懐かしんでおり、また自分が英国人であることを誇る態度もしばしば見せている。一方ウィリアムの詩においても、郷愁が示された作品の他にも、愛国的心情が基調となった作品¹¹が目立つ。たとえばこの作品集では、ナポレオン戦争に想いを馳せる詩がいくつかあるが、それらには、圧政に立ち向かう者の勇氣、自由・独立の精神を讃え¹²、そうした精神を支える国として英国を誇りに思うといった調子がある。彼らは、見聞を広め、新しい知を獲得するというより、英国のよさ、故郷のよさを再確認するために旅に来ているように見える。まるで、彼らは片足を英国に置いたまま、もう一方の足でヨーロッパを旅行し

11 愛国心をもっとも明らかにしているのは、“On Being Stranded near the Harbour of Boulogne” であるが、他にも目立たない形ではあるが愛国心はそこそこに見られる。

12 振り返って見れば、1790年ワーズワス二十歳の時の大陸旅行においても、アルプスの崇高なる風景を見てくることの他に、William Coxe の *Travels in Switzerland* に描かれたスイス山岳人の自由・独立の精神、民主的な愛国精神を確かめにいくことが目的だった。スイスの人々の英雄的な精神は、ナポレオンの圧制をも耐え忍んだことでますます称揚されることとなる。

ているかのようである。

そしてこの作品集の終盤に置かれた“Stanzas Composed in the Simplon Pass”という作品では、いよいよ里心という牽引力の方が強くなる。前半（第1, 2連）では, Vallombrosa, Anio川, Paestum, Pompeii, Florence, Rome といったイタリアの地名を挙げ, これらを訪れずに帰れようかと, ツアリスト的好奇心を吐露するのであるが, 後半部（第3, 4連）に来ると様子が変わる。

Now, risen ere the light-footed Chamois retires
From dew-sprinkled grass to heights guarded with snow,
Toward the mists that hang over the land of my Sires,
From the climate of myrtles contented I go. (17-20)

1, 2連では, イタリアの名所は全て訪れるぞという勢いであったのに, 第3連のはじめで突然, 朝露のきらめく草原を去り, 雪で覆われた高地へと帰っていくレイヨウのイメージが描写される。そしてこれをきっかけに詩人の態度は一変し, 私も満足して祖国へ帰ろうと言い出すのである。そして, 黒々とした松の木が, 背後から日の光を受けて輝き出すように, 自分の気持ちも明るくなったと言い, 最終連（第4連）で次のように言い放つ。

Each step hath its value while homeward we move; —
O joy when the girdle of England appears! (29-30)

ここでは気持ちは完全に故郷へ向かっている。¹³つまり, 異国へ, 未知なる世

13 シンプロン峠は, もちろん1790年弱冠二十歳のワーズワスがアルプス旅行をした際, 勇みたついで登ったものの気づかぬうちに峠越えをしてしまったという経験をした記念の場所であり, そのことはドロシーの旅行記にも感慨深いものとして記されている。ウィリアムの詩は直接的にはそのことに触れていないが, 期待が現実に裏切られるという構図は, 勇み立つ思い, 外向きの力が別の力によって引き戻されるというベクトルの動きを示しており, その点で1820メ

界へという外向きの力は、故郷へ、馴れ親しんだ場所へという内向き・後ろ向きの力にゆり戻されるわけだ。

この詩は、観光地として有名な土地を訪れずに帰るという、反ツアリズム的な内容を持つ点で、1803年のスコットランド旅行の記念に書かれた“Yarrow Unvisited”と共通するものを持つ。これは、数々のバラッドで歌われた有名な Yarrow をぜひ見に行かなければ、という妹の主張を頑なに拒絶し、ついにその場所を訪れぬまま帰るという内容であり、対話形式と自問自答という違いはあるが、旅心・好奇心を打ち消すという点で“Stanzas…”と同じようなベクトルの動きを持っている。しかし Yarrow の詩の方が面白いのは、多分 “’Twill soothe us in our sorrow / That earth hath something yet to show, / The bonny holms of Yarrow” (62-64) という終わり方のためである。この世界にはまだ我々の訪れていない場所があることを思って慰めとしようという終わり方には、次の旅を予感させる期待感があり、結局この詩では、漂泊の想いが勝っていると思われる。それに対し Simplon 峠で詠んだ“Stanzas…”においては、“With a hope (and no more) for a season to come, / Which ne’er may discharge the magnificent debt?” (11-12) とあり、またの機会を期待しても、ひょっとしたらそんなチャンスはもう訪れないかもしれないという認識が示されている¹⁴。これは、50歳という年齢のためもあるのだろうが、次の旅への期待を殺ぎ、かといって今回の旅の好奇心をも充足せずに帰途に就くため、この詩は広がりを持たぬまま終わってしまうようだ。

1803年の旅を記念して書かれたものには傑作とされるものが多いのに対し、1820年のものはほとんど省みられることがない理由を考える際、この空間の

、年のこの作品の構図の下敷きになっているようにも見える。1790年の旅では、ワーズワスはスイス側からシンプロン峠に向かいイタリアへ抜けたのだが、1820年の旅では、彼らはイタリア側から峠へ向かう。そしてイタリアに後ろ髪惹かれる思いをしながらスイスへと降りていき、フランス経由で帰路に着く様子が、ドロシーの旅行記に記されている。

14 実際にはワーズワスは1837年、67歳の時に Henry Crabb Robinson とともにイタリア旅行を敢行している。

広がりという問題があるかもしれない。1803年の旅においては、Yarrowの詩をはじめ、“The Solitary Reaper”にしても、“Stepping Westward”, “To a Highland Girl”や“Glen Almain”などにしても、時空間が広がっていく——深く、広く、遠く、または過去や未来へ広がっていくという特徴がある。¹⁵こうした特徴が作品の余韻を生み、読む者の心を、それこそ漂泊の想いへ誘うと思われる。そうした広がりがある1820年の旅の詩には欠けている。迫り来る老いを意識してか、未来への展望は閉ざされ、かといって過去へ向かって回想の空間が広がることもない。この旅は30年前の旅の跡を再訪するものだったが、ウィリアムの作品にはそうした意識もあまり見られない。むしろドロシーの旅行記の方が、自分と兄の精神史を遡ろうという姿勢を見せる。それによってふたつの旅はオーバーラップされて、作品に奥行きを作り出すことになっている。ウィリアムの記念詩集では、ところどころきらりと光るフレーズはあるものの、全体として平板な仕上がりに終わっているものが多いのである。

<旅先に求めるもの—郷土愛>

さて、旅に出て、未知なるものを求め、新しいものを見聞きすることに憧れつつも、常に故郷への想いにゆり戻されるとというのが、ワーズワス後期の旅の特徴であることを見てきた。しかし最初に示唆したとおり、程度の差はあれ、こうした傾向はすでに1803年の旅の詩にも潜在していたのであり、home-thoughts、郷土愛というのは、ワーズワスの旅全般にわたって見られる特徴だと言ってよいかもしれない。

では、旅人ワーズワスはどういう時に自分の故郷を思うのだろうか。それをここで再び確認しておく、スイス人の郷土愛、強い郷愁についての逸話

15 “Glen Almain”では、伝説の英雄オシアンが眠るとされる人里離れた深い谷間、深い静けさが作品に広がりを持たせている。“The Solitary Reaper”では、乙女の歌が旅人の想像力を誘って時空間を広げる。またこの詩や“Stepping Westward”, “To a Highland Girl”には移動の感覚があり、果てしなき道を行く旅人のイメージが空間の広がる感じを作り出している。

を聞いたとき(“On Hearing the ‘Ranz des Vaches’”), 故郷に帰ってきて
幸せだと話してくれた旅商人に出会ったとき(“The Italian Itinerant and
the Swiss Goatherd”), 自分の住処へ帰っていくレイヨウの姿を思い浮か
べたとき(“Stanzas Composed in the Simplon Pass”)などであることが
分かる。またどのような光景に心打たれているかと言えば、魚売りの女たち、
収穫を終えて家へ帰ろうとする人々の一団、地元の英雄を讃えて集まる愛国
者たち、聖母マリアの宮に集う信仰篤き人々など、地域共同体の姿が見えて
くる。つまり旅に出たワーズワスは、自分の生まれた土地、暮らす場所に愛
着・誇りを持つ者たちの姿に惹かれ、それに触発される形で故郷を思うので
ある。

1820年の旅におけるこうした関心は、実は1803年の旅にも見られた。この
ことを示すのが“*The Three Cottage Girls*”である。これは、大陸旅行中
に、自分の生まれた土地で周囲の湖や山と調和して暮らす健康で快活なイタ
リアやスイスの娘たちの姿を眺めているうちに、17年前に訪れたスコットラ
ンドで出会った娘のことを思い出すという内容である。1, 2連で、ルガノ湖
畔の健やかなる土地で自発的な労働にいそしむイタリア娘を描き、3, 4連
で、ウリの急峻を駆け登り歓喜の叫び声を周囲の野山にこだまさせる美しく
も勇敢なスイス娘を描写したのち、第5連で詩人は、“*Sweet Highland
Girl! a very shower/Of beauty was thy earthly dower*”(53-54)と、17
年前にインヴァスネイドの滝のそばで見かけた娘のことを思い出し、彼女に
ついてかつて書いた詩(“*To a Highland Girl*”)のフレーズをここに繰り返
す。詩人は、17年という時の流れが彼女の様子を変化させてしまっているか
もしれないと一抹の不安を抱くが、次のように言って自らを安心させる。

Bright Spirit, not with amaranth crowned
But heath-bells from thy native ground,
Time cannot thin thy flowing hair,

Nor take one ray of light from Thee;

For in my Fancy thou dost share

The gift of immortality;

(70-75)

自分の記憶の中に留められた娘の姿は、永遠に若々しい美しさを失うことはない、というわけだが、興味深いのは、記憶の中の彼女の姿は、常世の花アマランスではなく地元の花エリカの髪飾りをしている、とわざわざ断っている点である。ハイランドの娘の姿は、その土地の風景とともに記憶されているからこそ永遠に色褪せないのだ、と言いたいかのようなのである。そして、記憶の中のハイランド娘のイメージと結びつくことで、イタリアの娘、スイスの娘たちもまた、永遠に輝き続けることだろう、と言って詩を結ぶ。

ここに描かれる3人の娘は、個別の風景の中のそれぞれ個性の違う3人である。にもかかわらず3人は、ひとつに交じり合い同一の印象を我々に残す。1820年の旅行記念詩集においてワーズワスが描く旅先での出会いの風景は、ひとつひとつ個別の風景であり、個別の良さを持つ一方で、どれも同じような印象を残す。それは、ワーズワスにとっての旅の喜びが、異国情緒・未知なる風景との出会いではなく、それぞれの土地において、自然と調和した暮らしを営む人々と出会うこと、いわばお馴染みの光景と出会うことにあるからではないだろうか。そうした視点から1803年の旅の詩を振り返れば、ここでもワーズワスの心を捕らえているのは、地元の英雄を大事に思う人々の姿 (“Rob Roy’s Grave”, “Glen Almain”) であり、自分の帰属場所にきちんとおさまって自分の言葉 (ゲール語) で話し、自分の仕事を快活にこなす人々 (“To a Highland Girl”, “The Solitary Reaper”, “Yarrow Unvisited”) であったことに気づく。

結局ワーズワスが旅先で求めている光景とは、*Lyrical Ballads* に描かれているような humble life, すなわち先祖代々受け継いできた土地に愛着を持ち、自然と調和しながら、その土地が与えてくれた仕事を坦々とこなす人々

の普通の暮らしなのだ。Lyrical Ballads 初版に描き出したような暮らしを求めて湖水地方へ帰っていったワーズワスは、今度は、同じような暮らしを別の土地で営む共同体の姿を求めて旅に出る。そしてそれぞれの旅先で出会った、郷土への愛に満ちた人々の暮らしぶりは、ワーズワスの中に、自分自身の郷土への愛着を再び呼び起こすのである。ワーズワスの旅の詩において、明らかな形であれ潜在的な形であれ、故郷への想いが、漂泊の想いへ向かう旅人をひき戻してしまうのは、こうした理由によるのではないだろうか。

The Prelude の12巻には、子供のころ、斜面の向こうへ消えていった道の線は、何か未知なるもの、果てしなきもの、永遠なるものへ自分を導いてくれるような気がして、憧れたものだということがと記されている¹⁶。そうしたロマンチックな漂泊の想いが彼を旅に駆り立てたのだろうが、繰り返し旅に出る度に、ますます故郷への愛着を深めていき、帰郷の喜びのために旅に出るといふふうになっていったと思われる。

最後に “In a Carriage, upon the Banks of the Rhine” の中から引用しておきたい。これはライン川沿いを馬車で旅しながら、景色が足早に流れていくことを嘆き、やはり自由に立ち止まっては、物思いに耽ることのできる徒歩旅行が一番だという内容になっている。

To muse, to creep, to halt at will, to gaze—

Such sweet way-faring—of life's spring the pride,

Her summer's faithful joy—that still is mine,

And in fit measure cheers autumnal days.

(11-14)

この言葉どおり、老年になってもワーズワスの wanderlust はおさまることとはなく、彼は生涯旅を続け、中でも1831年(61歳)、1833年(63歳)にはスコットランドを、1837年(67歳)にはイタリアを訪れて作品を残している。

16 注2参照のこと。

そしていずれの旅においてもきちんと帰郷し、1850年に自宅で亡くなって故郷の土に埋葬された後は、その場所が世界各国からの旅人たちを呼ぶ場所となっている。

Select Bibliography:

Wordsworth, William. *Poetical Works of William Wordsworth*. Ed. Ernest de Selincourt and Helen Darbishire. 5 vols. Oxford: Clarendon, 1940-49.

———., *The Prelude, 1799, 1805, 1850*. Ed. Jonathan Wordsworth, M.H. Abrams, Stephen Gill. New York: Norton, 1979.

Wordsworth, Dorothy. *Journals of Dorothy Wordsworth*. 2 vols. Ed. Ernest de Selincourt. London: Macmillan, 1970.

Gill, Stephen. *William Wordsworth: A Life*. Oxford: Oxford UP, 1990.

Glendening, John. *The High Road: Romantic Tourism, Scotland, and Literature, 1720-1820*. New York: St.Martin's, 1997.

Johnston, Kenneth R. *The Hidden Wordsworth: Poet·Lover·Rebel·Spy*. New York: Norton, 1998.

Yoshikawa, Saeko. "Traveller and Dweller: Wordsworth in Grasmere," *Poetica* 54 (2001): 39-50.

吉川朗子「帰属場所を求めて——ワーズワス兄妹によるスコットランド旅行（1803）」『神戸外大論叢』54巻3号（2002）：87-100頁。

Wyatt, John. *Wordsworth's Poems of Travel: 1819-42*. New York: St.Martin's, 1999.